

【事業実績】「守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す～」事業 2019 年度記録写真

1. 調査保存事業

上越 20191118・19

京都府立聾学校 20200220・21・25



2. ワークショップ

(教師向け) 20200122

(生徒向け) 20200123



3. 公開会議

20200301



4. 視察

大阪北視覚支援学校 20200117

新潟盲学校 20200302



5. レプリカ製作

障害者教育の歩み後世に

文化庁の「地域と共働した博物館創造活動支援事業」の採択事業。2023年度までの5年間、高田盲学校や、国の重要文化財に指定された日本初の盲・聾学校「京都盲聾院」の資料を整理し、適切な保存、活用方法を探る。

また、全国的に学校の統廃合が進み、資料の散逸や廃棄が懸念されるため、全国の総合支援学校や企業、博物館にある関連資料の保管や活用状況を把握するアンケートも実施した。

実行委は歴博や上越市立歴史博物館の学芸員

高田盲学校などの資料

活用へデータベース化



高田盲学校の資料をデータベース化する作業に取り組む実行委員会のメンバー＝上越市

のほか、京都府立聾学校、義肢装具製作会社、流プラザに集まり、福祉関係の大学教員らで構成。年数回、高田盲学校の資料約650点を写真撮影し、形状や内容などを記録している8(47)6130。

上越市歴史博物館学芸員ら

障害者教育の歴史を後世につなげよう。長岡市の県立歴史博物館(歴博)や上越市立歴史博物館の学芸員らが「守れ!文化財」モノとヒトに光を灯す」事業の実行委員会を結成し、上越市にあった県立高田盲学校などの資料をデータベース化する作業に取り組んでいる。東京パラリンピック開催を控え、障害者の社会参加を広げる機運が高まっており、実行委は「全国各地に眠っている障害者関連の歴史資料の保存を進め、障害者の社会参加の歴史をひもときたい」と意気込んでいる。

高田盲学校の介助員だった上越市の霜島弘道さん(73)は聞き取り調査などに協力しており、「教材一つ取っても、生徒の理解が深まるようにと各学校でさらに改良を加えていた。各校の歩みを知ることが障害者教育の将来にも役立つはず」と期待を寄せる。

実行委をまとめる歴博の山本哲也さん(56)は「関係者の努力の積み重ねが今の障害者教育につながっている。成果を展示会で示すことで、埋もれていた文化財の価値に気付いてもらいたい」と話す。

障害者教育の資料 保存と活用考える

長岡・県立歴博

障害者の教育や社会参画に関する資料の保存と活用を考える会議が1日、長岡市の県立歴史博物館で開かれた。同館が中核となって進めている聾、盲学校の資料の調査事業について、専門家が報告した。写真＝。

調査事業は、同館や京都府立聾学校などで行う。実行委員会が、2019年度から5年間行う。上越市の旧高田盲学校や、国内初の盲・聾学校である旧京都盲啞院の資料を中心に整理しており、会議は初年度の成果を発表した。

高田盲学校を担当する上越市立歴史博物館の宮崎俊英館長は、旧校舎での調査を報告した。職業訓練用に人体のつぼが描かれた図や教員が手書きした学校史を紹介。「新しい資料も見つ

かり、広がりを感じる」と手応えを語った。

1878年開校の京都盲啞院の資料は国の重要文化財に指定されている。担当する調査員は、「う」の発音は「重い物を持ったときに発する音」とするなど、体の感覚に照らして発音を教えた教材を紹介。「教員の工夫の歴史が積み重なっている」と資料の価値を解説した。

全国66の盲学校、視覚特別支援学校を対象としたアンケート調査の結果報告もあり、資料の保存場所や説明できる職員の不足が課題とした。

